

地域情報（県別）**【大分】 医家筑波家7代目として患者に寄り添う診療に努める-筑波貴与根・おおいたメディカルクリニック院長に聞く◆Vol.1**

2020年10月2日（金）配信 m3.com地域版

江戸時代後期から200年以上続く医家筑波家の7代目となる、おおいたメディカルクリニック院長の筑波貴与根氏。医家の伝統を受け継ぐ中でどのような思いで現在に至ったのか。同クリニックの地域での役割、開業医から勤務医への転身の背景、筑波家に代々伝わる教えなどについて聞いた。（2020年9月3日インタビュー、計2回連載の1回目）

[▼第2回はこちら](#)**——おおいたメディカルクリニックの地域での役割や特徴について教えてください。**

当院は大分市にある19床の有床診療所です。前身の大分消化器病院のころからの流れで消化器疾患（特に内視鏡検査などの胃腸系）をメインとしつつ、高血圧や高脂血症などの慢性疾患の外来患者も診ています。さらに最近では、大分県立病院や大分赤十字病院などから紹介の看取りの患者さんも診ています。

慢性疾患の患者さんは近隣の方が多いのですが、内視鏡検査などは大分市内の広域から来られますし、由布市、豊後大野市、竹田市などからも来られます。



おおいたメディカルクリニック院長・筑波貴与根氏

——先生は豊後大野市の出身だそうですね。

はい、私は豊後大野市の生まれで、福岡大学医学部を卒業しました。次男ですので福岡に残ることも考えましたが、地元の大分で医療をしたいという思いもありましたので、卒業と同時に大分大学医学部附属病院の第一外科に入局しました。その後、臼杵医師会病院、大分赤十字病院などで研鑽を積んだあと、研究のために東京築地にある国立がんセンター研究所病理部へ出向して学位を取り、臼杵市医師会立コスモス病院の外科部長を経て、1996年に生まれ故郷の豊後大野市で筑波クリニック（無床診療所）を開業しました。

地元で開業したことは本当に親孝行だったと思います。開業当初、高齢の患者さんから「あなたのお父さんには良く診てもらったんよ」とか、「あなたのおじいさんは馬で往診に来よったわ」とおっしゃる患者さんもいて、地元の方々にも喜んでくれました。

——筑波クリニックは今も続いているのですか。

2018年に当院へ入職するタイミングで閉院しました。20年ほど開業していたのですが、途中から「自分のキャリアはこのままでいいのか」という思いが湧いてきました。開業して15年過ぎた頃より竹田医師会病院での2次救急の当番医や大分健生病院の専門外来や訪問診療、へつぎ病院の内視鏡検査などを掛け持ちしていろいろな症例を診るなかで、「まだ自分でもやれるところがあるな」という思いもありました。このころの経験が、今のクリニックでの診療に活かされているのは間違いないですね。

それまで通院していただいていた患者さんには申し訳ないという思いもありましたが、親にも許しを請うて開業医を辞めることにしました。ちょうど当院の募集もありましたので、2018年に副院長として入職し、2020年4月に院長に就任しました。

——医家筑波家7代目というのは凄いですね。

筑波家は豊後国の岡藩の藩医の家柄で、1代目から藩医として仕えており、3代目は岡藩の藩医として最も位の高い次席医師にまで昇進しました。4代目は大分県立病院（当時の県立医学校）の1期生でした。5代目は長男が継いだのですが、三男は長崎医専（長崎医大の前身）を卒業後に北里研究所に入り、サルバルサン（梅毒治療薬の一つ）で有名な秦佐八郎に師事しました。6代目が私の父で、地元の豊後大野市で開業しました。そして私が7代目になります。

豊後大野の実家には、馬嶋流眼科秘伝書、動脈一覽図、薬籠（薬の箱）など、さまざまな医家史料が残っていました。今は大分県立先哲資料館に預けているのですが、当時は大学病院の眼科教授の先生が実家の巻物を見に来たりしていました。また、坂本龍馬が保身用に持っていた銃と同じものも実家で見つかり、地方新聞にも取り上げていただきました。



馬嶋流眼科秘伝書（クリニック提供）



薬籠（左）と動脈一覽図（右）（クリニック提供）

——代々伝えられた教えといったものはありますか。

これも実家にあったものの一つですが、熊本医学館（再春館）を興した医師の村井琴山の掛札があります。「病を論じて、もって国におよび、診をたずねて、もって政（まつりごと）を知る」と記されています。これは「病気を研究して得た知識や理論を応用して国の政治をつかさどる」という意味で、筑波家初代の筑波資富（しふう）が開業する際に、医師開業の心構えとして村井琴山が贈ったもののようです。政界や医学界に対するいましめとも解せるこの名句を、筑波家では200年以上にわたり代々受け継いで来ました。今のコロナ禍の状況にも通じる内容で、病気と政治との関係は不可分のものだというイメージだと思います。



筑波家に代々伝わる村井琴山の掛札

医師として優秀な同期はたくさんいますが、自分の特徴はこの血筋だと思っています。サラブレッドという語弊がありますが、医家7代の血が流れていると思うと、医業を天職として目の前で病んでる人がいると助けてあげたいですし、患者さんの立場になって診療を心掛けたいという気持ちは常にあります。それが地域への貢献のみならず社会全体や国のためでもあると思っています。

——子供のころから医者になるつもりだったのですか。

他の道に進む考えはもっていませんでした。父は地元で小さい開業医をしていましたが、誠実でどちらかというところつつまじやかな方でした。医師の心構えのようなこともあまり言わなかったですが、父の背中をずっと見てきました。患者さんのことを第一に考え、ただ薬をたくさん投与するといったようなことはせず、生活面の改善が必要であれば厳しく指導するようなどころもありました。今の自分の診察スタイルは、そんな父の影響を受けているのかなと思います。そして、なによりも自分が地元豊後大野市で開業したことを大変喜んでいただき、少しは親孝行もできたのかなと思っています。

◆筑波 貴与根（ちくば・きよね）氏

1986年に福岡大学医学部卒業後、大分医科大学第一外科（現大分大学医学部消化器外科）に入局。東京築地国立がんセンター研究所病理部、臼杵市医師会立コスモス病院外科部長を経て、1996年に筑波クリニック（大分県豊後大野市）を開業。2018年7月におおいたメディカルクリニック（大分県大分市）に副院長として入職し、2020年4月に院長に就任。

【取材・文・撮影＝堀 勝雄】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

